

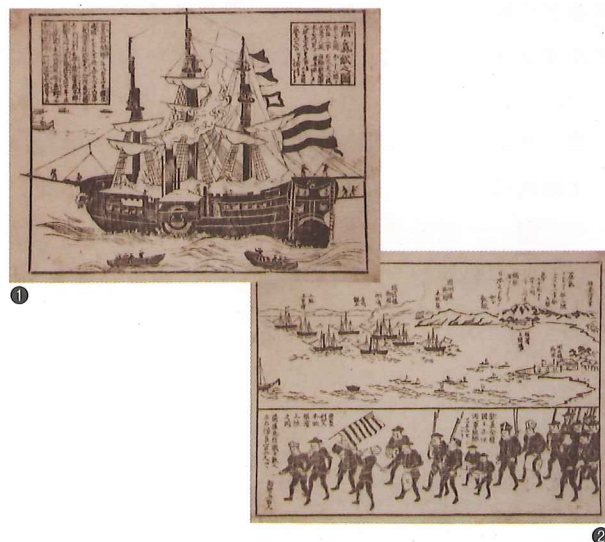
# I

## 出来事はどのように伝えられたか

かわらばん「瓦版」から「新聞」へ

現代の日本では、一世帯あたり平均して0.95部の割合で日刊紙が読まれていると言います。つまりわが国の大多数の家庭において毎朝、最新の出来事や情報がぎっしり詰め込まれた新聞が届けられるのは、もはや当たり前の日常です。ところで、政治、経済をはじめスポーツや展覧会に至るまで、様々な情報を安価に入手できるメディア＝「新聞」が、日本では明治維新後に欧米から新しくもたらされた文物の1つであったことは周知の事実でしょう。「新聞」という語の初出は、明治を目前にした1866年福沢諭吉著『西洋事情』で、「新しく聞き知った出来事」という意味をもたせた「News」の邦訳でした。

それ以前の日本には現代の「新聞」の代わりになる媒体はありませんでした。徳川幕府は何度となく出版統制令を出し、時事的な事柄についての報道を一切禁じていたからです。そうした中で、「瓦版」と称される一枚刷りの木版画が、政治的な内容以外、例えば地震や火事などの災害や、心中などの人情沙汰を伝えるメディアとして売られていました。現存する「瓦版」の最も早い例は、元和元年(1615)の大坂安部之合戦において豊臣方が徳川方に敗退したという大事件です。「瓦版」は速報性が売りであったため、彫りの質も決して良いとはいえ、摺りも墨一色という粗末な印刷で、版元もほとんどが定かでない非合法の出版物でした。しかし「読売」と呼ばれ、江戸市中や京、大坂で売られ



※所蔵表記のないものは当館蔵  
 ① 瓦版「蒸気船之図」(太田記念美術館蔵)  
 ② 瓦版「亜墨利加人本牧横濱上陸之図」(太田記念美術館蔵)  
 ③ 新聞錦絵「郵便報知新聞」開版挨拶(明治8年)  
 ④ 新聞錦絵「東京日々新聞四七二号・舟乗政吉」(明治7年)



③



④

て出回ると、それらが街道を通じて、出来事を日本全国に広めたのでした。

なかでも嘉永6年(1853)と翌7年の2度にわたる黒船来航は、現存するだけでも300種という多種多様の「瓦版」を生み出しました。それらを通覧すると、黒船の絵とその大きさを記したものの、ペリーの顔を描いたもの、浦賀沖や沿岸の様子を描いたものなど、多岐にわたります。しかし黒船の形はどこかおかしく、また、まるで鬼のように表わされたペリーの顔貌からは、初めて見る対象を限られた時間で何とか絵にし、その驚きを多くの人々に伝えなければ、という描き手の荒い息づかいが感じられます。

維新をむかえ、近代的な形態をもった日刊の新聞が初めて刊行されたのは、明治3年(1870)『横浜毎日新聞』で、その後『東京日日新聞』『郵便報知新聞』などが続々と創刊されました。ところがこれら当初の新聞は、挿絵もなく漢文漢語の読める知識人向けに書かれており、一般庶民には馴染めない内容でした。このような新聞と庶民との乖離をうめるべく明治7年から数年間発刊されたのが、「新聞錦絵」です。「新聞錦絵」は、江戸時代に庶民に親しまれた「錦絵」の形態を用いつつ、様々な出来事を伝える「新聞」としての機能をもつメディアでした。江戸と明治という時代の境界に生まれたこの文化的産物は、和と洋とが絶妙にミックスした独特の魅力をもっています。しかし、漢字にふりがなが付され、挿絵の入った「新聞」が普及するとともに、またたく間に衰退してゆきました。

今なお、出来事を伝える媒体は、変化し続けています。変化の早さや大きさばかりが目につきやすいものですが、一方で長きにわたって「変わらないもの」もあるように思います。本展を通じて、そのようなことも感じていただけるかもしれません。

(助教 鎌田純子)

# II

## 絵葉書の誕生

日本の郵便制度は明治4年(1871)より始まりました。さらに同6年には、逓信省による「官製葉書」が誕生します。それまで日本の手紙の様式には、葉書という形態は存在しませんでした。郵便制度の産みの親である前島密は当時ヨーロッパで急伸していた低額の簡易郵便「ポストカード」が、郵便定着への決め手となると考え、葉書を購入して投函すれば、そのまま配達される「官製葉書」を導入しました。

制度としての「絵葉書」の始まりは、明治33年(1900)、郵便法規改正により「私製葉書」の使用が認められてからです。私製葉書の認可とは、紙に「切手」を貼れば郵便として、日本全国(あるいは外国にまで)届く、ということです。業者は葉書大の紙(約90mm×約140mm)に絵や写真を刷り込んで「絵葉書」として販売し、以後、デザイン性の高い絵葉書が数多く発行されるようになります。

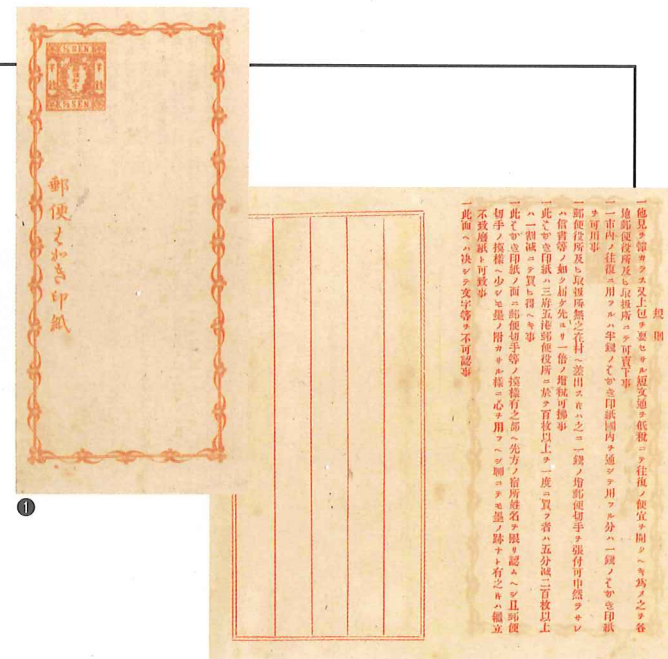
日本最初の児童文学者として知られる巖谷小波は、絵葉書普及に大きな役割を果たした人でもあります。小波は私製絵葉書が解禁になる以前から、仲間達と官製葉書の裏面に絵を描いて送り合っていました。



① 明治6年 二つ折葉書の表と中(切手の博物館蔵 大島正昭コレクション)  
 ② 明治29年 巖谷小波宛葉書  
 ③ 明治44年 黒田湖山差出 巖谷小波宛年賀状  
 ④ 明治44年 歌川国松差出 巖谷小波宛年賀状



⑥



⑦

絵葉書解禁の明治33年には、小波はドイツにいましたが、日本から送られた翌年の年賀絵葉書について、次のように評しています。

其次の年の年始状には、日本の絵葉書が山の様に舞い込んだ。然るに一々それを見ると、さりとてはお座の覚めた物計り。彼紅氈の余にも戯れて、日本の景色は富士山に限り、鳥は雀より他には無いのかと云われても、さて一言も無かった。



⑧

⑨

このように未熟な日本の絵葉書でしたが、明治35年、逓信省が万国郵便連合加盟25周年を記念して絵葉書を発行したところ、大評判となり、その後明治37-8年日露戦争が勃発すると、逓信省は戦況を「写真」絵葉書として発売、さらに民間では戦地へ送る絵葉書(例えば美人絵葉書など)も多種多様に作られ、大絵葉書ブームが到来します。

絵葉書解禁から10年後の明治44年巖谷小波宛年賀状の中には、現在の年賀状と同様に家族写真や綺麗な印刷絵葉書も登場しています。小波もさぞ満足したことでしょう。(学芸員 長佐古美奈子)